



414
A 4437

(第百十一號中ノ別添第三)



千八百七十四年八月十日上海ノ日本總領事館ニ於テ品川氏ヨリシワード氏ニ贈ル書

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

拜啟米國ノ士人前ニ廈門ニ於テ米國ノ領事官ヲ勤メシゼテラールニテヤールスレゼンドルニ千八百七十二年十二月日本ニ在ル米國公使ノ手ヲ經テ日本ト合衆國トノ千八百五十八年ノ條約第十條ノ趣意ニ隨テ東京ノ外務省ノニ事官實ニ出仕セシ者即チ近頃日本帝特派委員ト

ミテ支那ニ表着セシ処千八百七十四年八月六日其職務ノ事ニテ福州及上海へ赴カントセシ途中厦門ニ到リシ時厦門ノ米國領事官ノ指揮ニテ上陸セシ米國海軍兵ニ捕ヘラレ強テ米國領事官ニ送リ遣ラレタルヲ及ビ翌日

又強テ厦門ノ米國領事官廳ニ送ラレタルニ其時今氏始メテ其捕ハレタル所以ノ罪状ヲ言聞ケラレテ知リタルト又此日ヨリ同月十三日迄米國領事官ニ強テ厦門ニ抑留セラレ是カ為メニ日本帝ヨリ委任セラレタル彼カ職務ヲ行フ

ヲ得ガリシト且兩度トモ今氏ヨリ領事官ニ告テ彼カ受ケケル強暴抑留ニ抵抗スルヲ得ガレ故ニ己ムヲ得ス唯力歴ニ從フ由ヲ云ヒ且ツ此處置ヲ非トシテ厦門ノ米國領事官ニ嚴シク之ヲ抗論シ又厦門ノ現任日本領事官吳碩氏ニ此日本帝特派委員ニ對シテ強暴ノ所為ヲ非トシ邦國ノ權利ヲ破リ且要負タル者縱令ト必スシモ公然タル公使ノ任ヲ受ルヲ得ストモ是聞化諸國ニ於テ受クル所ノ特權正利ニ背キタル者トシテ嚴正ナル議論ヲ以テ抗言セ

シテ又千ハフ七十四年八月十三日
官ヨリ吳碩氏ニ告テレゼンドル氏ハ米國ノ法
律及ニ其支那トノ條約ヲ破リテ支那政府ニ敵
對スル征討ヲ助言シ補翼シ勸奨セシ罪狀ヲ以
テ米國領事官館ニ於テ領事官ノ命ニテ捕ハレ
タル事ヲ云ヒ又レゼンドルニモ右ノ處置ハ此
景ニ在ル米國公使館ヨリノ指揮ニ随テ行ヘ
テテ告ケ知ラセタルヲ等ハ是下ノ必然既ニ
知セラレタルヲナル可シ

当月十三日ノ午後レゼンドル氏廈門ノ領事官

廳ノ現任書記官ノ護送ニテ上海ニ送ラレ全氏
ハ港ニ來着シ時米國總領事官ノハルシヤル
下ヨリ贈リ來レト云フ書付ヲ全氏ニ讀
カセタリ是ニ依テ全氏始メテ公使ノ命令ニ
其捕囚ヲ赦ルサレタルヲ及ニ廈門ノ領事官ヨ
リ全氏ニ負ハセタル罪狀ヲ紀問ノ為メニ全氏
ヲ留メ置クヲナカル可キヲ理會セリ
ゼ子テールレゼンドルヲ捕囚セシ景狀ハ今此
事件ニ關係セル諸政府ノ間ノ通信ノ主意
ハ余ヨリ日皇政府ニ報告ス可キ為メニ願

クハ上ニ云ヘル上海ニ於テ全氏来著ノ時足
下ノ命令ニテ全氏ニ讀聞カセタル書付ノ寫シ
ヲ成ル可クハ郵便船日本へ出帆以前ニ贈リ下
サレ度ハ段相願候

呂川

○
(第百一十一號中ノ別紙第三)

千八百七十四年八月十五日上海ノ米國領事館ニ於テシワート氏ヨケフオエニス氏

事館ニ於テシワート氏ヨケフオエニス氏
ニ贈レル書

拜啟英國ノ汽船アラウケンアパカル号當港ニ

到着セハ是下時ノ都合宜敷ハセテラトルチ下

レスレゼンドルノ事ニ就キ厦門ノ領事官館

ニテラシヤルヘノ受取書ヲ付船ニ托シ出遣シ

可被下度候且セテラールレゼンドルヘ公使館

ヨリノ諭示ハ彼カ事ニ於テ凡同等ヲ要セス其

捕囚ヲ赦免セラレシ趣ヲ申達シ可被下候

右ハ是下此事ヲ施行スルノ任權タル可ク候

シオルジ、且スシワート

（第八百十一號中ノ別紙第六）

第三百八十六號

一千八百七十四年八月十三日上海ノ米國

總領事官館ニ於テシワード氏ヨリウケ

ルレムス氏ニ贈レル書

拜啟余カ書狀第三百八十三號及ヒ第三百八十

五号ニ其ニ附加シテ申送りタル電信ノ事ニ

就テ今又足下ニ余カ此事ニ於テテバルト

ト、オフステイトヘ言送りシ書狀ノ写ヲ呈進

シ候（第七百九十七號）

此事ニ於テ應カヲ為サシテ余ニ於テハ六ヶ敷

ク且費用モ多カシト見ユル故ニレゼンド

ルヲ長崎ノマシガム方ヘ送り遣ス可クト存

古ノ遺置ニ就キ別ニ故障モナクハ左様ニ為ス

可ク候

此場合ノ困難御諒察可被下候且足下ニ於テモ

余カ始終ノ取扱方ヲ御称許被下候様相願候

シワード氏ヨリ

（第八百十一號中ノ別紙第七）

第三百八十六號

一千八百七十四年八月十九日上海ニ於テ

シワード氏ヨリウヰルレムス氏ニ贈ル書

拜啟余カ書狀第三百八十七號ノ事ニ就テ今又
報告致候ゼ子ラールレゼンドル当月十六日ニ
上海ニ到着シ余ヨリ出セル命令ニテ直チニ其
捕囚ヲ赦ルセリ
此港ニ在ル日本ノ総領事官余ニ書狀ニ通テ贈
リ此赦免ノ命令ノ寫シヲ贈リ遣ハサレタシト

請ヘリ右書狀ニ余カ答書及ヒ余カ命令ノ寫
シハ別帛ニ認メ日進致候

余推察スルニ是書付ヲ得ント欲スル意ハ在リ

之下ヨリ受ケタル諭示ハゼ子ラールレゼンド

ルノ罪ヲ免ス可キヲニ非サルヲヘンデルソン

氏ハ全氏ヲ捕囚セシハ是下ノ諭示ニ随フド云

ヒタル様ニ見ユレハナリヘンデルソン氏ハ余

カ家初ニ贈リタル電信ノ意ハ是下ヨリ近日申

裁サレタル教示ノ上ニ甚ク殊ニカツセル氏及

ヒワツソン氏ヲシテフラルモサハ討ノ軍ヲ去

ラシムル諭示ノ彼カ報告ノ返答待チ居ル
教示ノ上ニ基キタルヲ甚タ其ク推量セシ
リ

余爰ニゼラトレゾンドルヨリ厦門ノ領事
官廳へ差出シタル抗論ノ写書ヲ封入レ進上致
シ候

此事件ニ就キ尚又後日可申上候

ジホルシ、スフ、シワリ

第百十一號中^別條七

是下是ニ依テ何々ヲ捕囚ス可キ諭示ヲ受ケテ
其權ヲ有ス若シ彼レ是下ノ管轄内ニ見ユレ
テハ之ヲ留メ監護シ置テ何々ノ罰金ニ是ノ
金高ヲ以テ阿米利加合衆國へ保合ヲ差出ス
迄ハ放チ還ス可カラス是レニ就テ其日ヨリ何
々ノ内ニハ支那帝國ト日本帝國ノ間ニ敵意ノ
事有リトモ決シテ之ニ關係セシム可カラス且
彼ハ右何々ノ期限ノ間ニハ右帝國ノ他ノ方
對シ或ハ其領地ノ部分或ハ其國民ニ對シテノ
戦争ニ加ハリ右帝國或ハ其國民ノ一人ヲモ

援助ス可カラス

チヘラレタルニシテ...

(第百一十一號中ノ別紙第九)

第七千四百六十四號

千八百七十四年八月十九日上海ノ東國

總領事官館ニ於テシワード氏ヨリ品川

氏ニ贈レン書

拜啟昨日ノ御書狀披見致候ゼマラレシ

ド捕因ノ一紙ニ命筆銘々ノ政府ノ間ノ通信

ノ事タル可ノ御セ哉サレ候故即チ彼ヲ赦免セ

ラレシ命令ノ寫書ヲワシントシヘ通達致レ可

中候

ジオルシゴフシワール

第百一十一號中ノ別紙第十

千八百七十四年八月十九日上海ノ日本總

領事官館ニ於テ品川氏ヨリシワード氏ニ

贈レン書

今日ノ貴書拜見仕候テゼ子ラレシ

敬免セラレシ命令ノ写ヲ日本中央政府ニ報知
ス可キ為ニ余ニ遣ハサル。御不承知ニ唯
之ヲワシシトシ一通達有ル可キノ由理會致候
右足下ノ主意ヲ我カ北京ニ在ル公使ニ報知致
候以テ今一應訊問申上候右写書ヲ余ニ送り
テ被ノ用ニ供スルニ就キ何カ故障ノ義モ有之
程哉此段並知致度候

イ、シナガワ

第百一十一號中ノ別紙第十二

第七千四百六十九號

一千九百一十四年八月十九日上海ノ米國

總領事官館ニ於テシワード氏ヨリヨ川

氏ニ贈レル書

拜然當日御差出シノ貴書悉ク拜見仕候足下此
京ニ在ル貴國ノ公使ニレゼンドン氏ノ事休ヲ
報知スルノ事ヲ通知仕候故順次ヲ以テ右敬免
ノ命令書ヲ此方ヨリ北京ニ在ル米國公使館ニ
通達可致候間此段申上候

ゼマラールンブスシワード

第百六十九號

千八百七十四年九月四日ワシントン外務

省：於テフサシ氏ヨリヘンデルソン氏ニ

贈レシ書

拜啟七月十一日御差出シノ第四十號拜見仕候

去ル八月二十九日ノ日附ニテ足下ニ差出セシ

余カ第二十號ノ事ニ就テ余ハ其説ケル疑問ヲ

更ニ論スルヲ要セヌ

当局ニ於テハ足下ノ趣意ノ其実ナルヲ洞悉シ

且未國ト和親ノ國々ノ間ノ戦争ノ時ニ於ケル

或ハ和親國ノ管轄内ノ謀叛ノ起レル時ニ於ケ

ル我カ政府及々國人ノ局外中立タルヲ保リ可

キ法律ヲ行フ為メニ政府ノ代理人タル者ノ注

意甚リ無キヲ賞譽スルカ故ニ政府ノ代理人タ

ル者モ亦自ラ法律ノ限界ヲ越エ或ハ其許ルカ

レサル所ノ威權ヲ行ハサル様ニ注意ス可キヲ

ナリ

另下カ六月十六日ノ布告中足下ノ書状ニ添ヘ

シテ寫書アリ右ハ余カ足下ニ贈リシ第二十號

ト共ニシワードニ贈レル第四百九號ニ表ハセ
ル右布告ノ趣意ヲ難シタル諸故障ノ由テ起ル
所ノ者ナリ

右ハ局外中立ノ法律ヲ破ルトノ故ニ指因及ヒ
此間ヲ促ス原來局外中立ト云フハ現ニ戦争ノ
実事立ルノ意ヲ含メリ

当政府ヨリハ支那ト日本トノ間ニ戦争ノ実事
立ルトテ告ケシニ非ス若シ右ノ如キ景況立リ
テ布告ヲ要シ及ヒ之ヲ許ルヌナラハ必ラ其
相敵對スル國ノ何レノ方ヘモ偏倚スルトナク

且不正ノ援助ヲ為ス者ヲ戒シメサル可カラズ
唯ニ一方ニ偏スル人ノミヲ罰セントスルトナ
カレ可シ

当局ハ北京ニ在ル米國辦理公使ウズルスカ
ルムスヨリ出セル諭示ニ依テ是下カ六月十
六日ノ布告ヲ出ス所ノ權勢ニハ關係セズ
第四百六十九號ノ諭示ニ於テ日本或ハ支那ニ
在ル公使タル者当政府ノ中立ノ義務ヲ保ツ為
メ書付ヲ出スノ權ハ既ニ之ヲ言ヘリ又公使
ニ於テ此權ヲ專ニスルトハ既ニ之ヲ告ケテリ

第百七十號

第百七十四號

千八百七十四年九月十日ワシントン外

務省ニ於テフサシヨリウナルレムス氏

ニ贈レル書

拜啟余カ第百七十九號ニ就テ足下ニ報知嚮導

セン為メニ厦門ニ在ル我領事官ヘンゲルソン

氏ヨリ千八百七十四年六月十六日ニ其出セシ

ワシントンフサシ

布告ノ旨シ並ニ日本ヨクフアルモホ征討ノ事

ニ於テ米國人民ノ関涉スルニ就テノ往復書及

ヒ年月四日ノ余カ答書ノ寫第二十一號ヲ通達

スル千八百七十四年七月十一日ノ彼カ書狀ノ

寫ヲ御通達申候

ワシントンフサシ

第百七十一號

第百七十六號

千八百七十四年九月十二日ワシントン

外務省ニ於テフサシ氏ヨリウケルレムス
氏ニ贈レル書

拜啟キニニ左ル米國ノ傳法^教師^トコルベツト氏ヲ
襲撃セシ人々ヲチフニ於テ立合吟味スル事ニ
就テ七月七日ノ御書狀第四十四號ニ就テ余甚
ク悦フ右事件ノ足下ノ取扱ヒ方ヲ當局ニ於テ
モ周密適當ナルト認メ且ウシツパルト氏モ
以公事ニ於テ堅固ニシテ分不アル所作ニ依テ
當局ノ賞譽ヲ得タル事ニ有之候

ハミルトンフサシ

○

第百七十二號

第四百十六號

千八百七十四年十月九日ワシントン外

務省ニ於テカドワラドル氏ヨリシワー

ド氏ニ贈レル書

拜啟千八百七十四年八月十一日ノ御書狀第七

百九十七號厦門ノ前領事官ゼ子ラーレゼン

捕囚ノ一條ヲ記セル者并ニ厦門ノ領事官

ヘンドルソン氏ト足下ト右事件ニ就キ往復ノ

電信ヲ記セル添書落手致候

當局未タ此處分ノ終局ニ到リシヲ聞知セス又

ゼ子ラールレゼンドルヲ亂問ノ為メニ扣留セ

シヤ或ハ畢竟如何ナル處置ヲ為セシヤ總テ聞

知セサル所ナリ

當局ニテハ支那ト日本トノ間ニ敵對ノ景況有

リシトモ未タ明白ニ見受不申又當局ニテハ

ゼ子ラールレゼンドルカ實ニフラルモヤ征討

ニ同伴セシトノ報知モ承知セス又彼カ廈門ノ

領事官或ハ他ノ領事官管轄内ニ於テ捕囚亂問

セララル可程ノ所為ヲ行ヒシトモ聞カス又

當局ニテハ彼カ罪ヲ被ハリテ捕囚セラレシ所

以ノ詳細ナル罪狀ヲモ聞カス是等ノ件々ニ就

キ報知無ク殊ニゼ子ラールレゼンドルニ負ハ

ス可キ詳細ノ罪狀及ヒ之ヲ保ス可キ證據并ニ

捕囚ヲ為ス可キ權限等ニ就キ其報知無ケレハ

當局ニテハ未タ其許可ヲ與ヘス及ヒ猶未タ其

可否ヲ言ハス是故ニ總テ是等ノ件々ニ就キ右

公事ノ諸手續并ニ現今ノ是況等ノ巨細ヲ取調

ハ詳悉ニ御申越有之度候

當局ニテハ近頃ノ書状ニテフラルモサ征討ヨ
シリシ是等ノ諸件ヲ論シ申候

現任セクレタリイカドールドル

第百七十五號

第四百二十五號

千八百七十四年十一月ワシントン外務省

ニ於テカドール氏ヨリシワート氏ニ贈レル書

御書状八百十一號并ニ廈門ノ前領事官ゼ子ラ
ルレゼンバルノ捕囚一件ニ就テノ別紙ヲ添ヘ

右處置ノ手續キ及ヒ終ニ彼カ監護ヲ免セサル
シ次第ヲ當局ヘ報知セシ者落手致シ足下ノ書
状七百九十七號及ヒヘンデルソン氏ノ書状第
四十二号及ヒ四十四号ト共ニ謹讀致候

當局曩ニ足下并ニ支那及ヒ日本ノ米國公使ニ
差遣ハセシ書状中ニフラルモサ土蕃征討ニ米
國人民ノ關係セル事ヨリ起レル事件ヲ論シタ
ル故ニ此書状ニハ今云フ所ノ事件ニミ限リ
ニ他ヲ言ハス其概論ノ如キハ曩ノ書状ヲ照
ラシ見ル可シ

既ニ受取タル書状ニテハ諸般ノ件々詳細ノ報
知無ケレハ當局ニテ未タ洞悉スル能ハサル事
多シ然レトモ現今聞知セシ丈ケノ事実ヨリ考
フルニ此事件ノ手續左ノ如クナル可シト見ユ
即チ千八百七十二年十二月頃ゼ子ラールレゼ
ンドル日本ニ入仕ス然シ被カ職掌ノ詳細ナル
様子ハ明白ナラス足下ヨリハ彼レ軍務ノ參謀
トシテ勸ク趣ニ云ハレタレトモ報告ニハ外務
省ニ関スル役目ニ入リタリト云ヘリ彼レハフラ
ルモサヘ進兵セントスル征軍ノ編製ニ手傳ヒ

タルカビレガム氏ノ骨折ニテ之ヲ引離サレ征
軍ハ彼ヲ伴ハスシテ發出セリ彼此軍ニ直チニ
モ或ハ直チナラスニモ猶關係セシト云フ一ハ
見エス且彼ハ横濱ヨリ香港ニ行キ其レヨリス
ハトウ及ヒ廈門ニ往テ支那ニ到着セシト報
告有リ其廈門ニ到リシ時ヘンデルソン氏ヨリ
彼レフラルモサヘ往クノ途中ナリト推察セラ
ル、由ヲ云ヒテ指令ヲ請ヘリ

此請ニ應シテ足下ヨリヘンデルソンへ彼ヲ捕
囚ス可キ指令ヲ為シ因テ彼レ八月六日ニ廈門

ニ檢テ捕囚セラレタリ是ヲ以テ領事官廳ニ議
論書ヲ出シ就中彼カ留メラレシ緝捕狀ニ嘗テ
罪狀ノ記載無キヲ論シ且ツ其日本ニハ仕セシ
ハ公然タル事ニテ條約ノ許ルセル所ナリ故ニ
引續キテ奉職スルハ決シテ米國ノ法律ヲ破レ
ルニ非ルヲ抗言セリ斯クテ彼カ望ミニ任セ上
海ニ送リ遣ハサレウヰルレハスノ諭示ニ隨ヒ
足下ヨリ其監護ニ在ルヲ免ルサレタリ是レ右
捕囚ニ就キ當局へ通達有リシ事ニテ實事ナリ
ト見ユルホリ

足下ヨリ種々論說モ中越サレゼ子ラールレゼ
ンドルノ支那ニ對シ敵對ノ趣及ヒ其元來入仕
ノ主意并ニ支那行ノ意ヲ顯ハサント欲セラレ
レトモ右ハ総テ議論推察ノ說ノミナリ
ゼ子ラールレゼンドルハ米國ノ人民ニシテ其
政府ノ為メニ忠勤アリテ前ニ廈門ノ領事官ト
シテ即チ其捕囚セラレシ官廳ヲ保チシ者ニテ
今日本帝ヨリ支那帝ニ使スル至重ノ委任ヲ受
ケル者ナリ
總之是等ノ事故有レハ重大ノ原由モ無ク唯許

多ク證據ヲ以テ定メタル罪過ノミニテ此彈ノ
獄ヲ起スハ甚タ不可ナリ此捕囚ノ法ニ合ヘル
一及ヒ彼ヲ監護ヨリ免ルセシトノ當否ナルイ
テ判斷スルニハ其罪狀及ヒ之ヲ保ヌ可キ手近
ノ證據ヲ詳ニ知ルヲ要ス當局へ来リシ諸狀ニ
ハ此要緊ナル件々ニ於テ更ニ其報知ヲ見ヌ
御書狀第八百十一号ニ添タル證據ノ書付ハ裏
書モ無ク署名モ無キ緝捕狀ノ体裁ナレハ蓋シ
捕囚ニ用フル緝捕狀ノ通常ノ体裁ノ寫シナル
可シ此書付ノ中ニ何レノ罪ヲ犯セシト云フ罪

狀ヲ載セス又何々ノ故ニ依テ此緝捕狀ヲ出セ
シト云フ事實ヲモ記セス又何々ノ訴訟或ハ報
告有リシト云フヲモ記セス八月十日ヘンデ
ルソノヨリ日本現任ノ領事官ヘノ書狀ニ云フ
ゼ子ラールレゼンドルハ米國ノ法律及ヒ其支
那トノ條約ヲ破リ支那政府ニ敵對ノ征討ヲ助
言シ補佐シ勸奨セシ罪ヲ以テ米國領事館ニ於
テ余之ヲ捕囚セリト云ヒ又其ウヰルム氏ニ
與フル書狀第十九號ニ云フ彼レヲアルモサ島
ヲ侵伐スル日本軍兵ヲ助ケルカ故ニ捕囚セリ

レ云ヘリ此書状ノ寫ハ彼カ書状第四十二号
添ヘテ當局へ贈レリ是等ハ唯罪状ヲ辨別シテ
言ヘル者ノ近似ナルニ過キス

爰ニ論スル罪過ハ各不定ニシテ何レノ時何レ
ノ処ニテ此罪ヲ犯セシト云フ一定ノ名称無ク
又犯罪人ノ身分ノ事ヲモ此所為ヲ罪過ナリト
為ス可キ特殊ノ事實若シクハ法律ノ明文ヲモ
言ハス

千六百六十年ノ法律ノ箇條ニ決ルニ其第二章
及ヒ第四章ニ見ユルヤ如ク支那ニ在ル米國ノ

領事官ニ米國人民支那ニ於テ法律ヲ犯セル罪
ヲ以テ訴ヘラレタル者ヲ捕留シテ糾問スルノ
權ヲ與フト見ヘタリ右ノ箇條ハ改定律ニ於テ
モ主意全ク同一ナリ犯罪ハ其行ヒタル土地ニ
於テ糾問セララル可キト此國ノ管治ノ一端トシ
テ衆人ノ承認スル所ナリ

又米國治罪法ノ定例及ヒ支那ニ於テ同様ノ公
事ヲ管治スルノ規則ニ緝捕状ヲ出スル權ヲ許
ルル條目ニ隨フニハ其身ニ緝捕状ヲ被ル可
キ人ハ必ス其所為法律上ニ明白ナル罪ヲ犯ス

シテナル可キヲ要ス又此犯人モ已レカ被レル
罪状ヲ問知ス可キ權利アリテ必ス之ヲ報知セ
ラル可シ

此故ニ當局ニテ問知セシトハ此事件ニ
於テ是等ノ要件一モ備ラサルニ似タリ
米國ノ領事官タル者ハ聽訟并ニ刑獄ノ兩科ヲ
兼子行フ者ト見ユ是レ蓋シ然ラサルヲ得サレ
ハナリ然レトモ法律ニ明白ナル罪過ヲ以テゼ
子シールレゼンドルヲ罪セシトモ見ヘス又彼
レモ當局ヘモ之ヲ通達セシトモ見エス

借又特殊ノ罪過ヲ以テ罪セシトハ見エサルノ
疑問ハ姑ク置テ上海或ハ厦門或ハ支那帝國ノ
領事官管轄内ニテ嘗テ罪過ヲ犯セシヲ以テ罪
セラレシトモ見エス却テ其反對ハ見ユルナ
リ

右征討ノ軍ハ日本ノ地ニテ編製シゼ子ラール
レゼンドルヲ伴ハスシテ出帆セリ同氏其後此
軍ト関連セシト嘗テ見エス
是故ニ若シ罪アリトセハ此証討ヲ助言シ補佐
シ得獎セシ罪過ハ支那ノ領事官廳管轄外ノ外

國於テ行ヒタル者ナリ

此他右事件ニ関スル一別ニ擧クルヲ要セス當
局ニテハ嘗テ聞知セシ總テノ事實ヲ見テゼ子
ラールレゼンドルカ支那或ハ日本ニ於テ何ノ
罪過ヲ行ヒタルヤ或ハ千八百六十年ノ法令若
シクハ米國ノ局外中立ノ法令ノ箇條ヲ破リタ
ルヤ否ノ疑問ヲ論議スルヲ用ヒス
然レトモ當局へ申シ越セル報知ノ故ニ依テ是
等ノ疑問ノ上ニ重大ノ疑無キニ非スト云フモ
過タリトセス

又ゼ子ラールレゼンドルカ糺問ノ為メニ日本
へ送リタルハ支那ニテ彼レニ對シ獄訟ヲ起ス
能ハサルノ疑ニ由テ然カセシナル可ケレトモ
是亦米國領事官ノ權限外ノ處置ナル可シ
不正ニ捕囚セラレタル囚人或ハ罪過ノ帰ス可
キ無クシテ捕囚セラレタル囚人ハ赦免セラレ
可キヲ其當然ナリ
彼ハ唯遁逃人ノ條約例ニ隨テ糺問ノ為メニ他
ノ國へ送ラル、ヲ得可シ日本ノ官廳へ右ノ如
キリ渡シラハ為スヲ得可カラス

然ニ是等ノ道理ニ依リ及ヒ報告ノ事實ヲ以テ
考フルニ當局ニテハゼ子ラールレゼンドル捕
囚ノ儀ハ法律ノ明據ス可キ無ク且ツ其許可ヲ
受ケ難シト決定セサルヲ得ス若シ此捕囚外國
政府ノ所為ナリシナラハ是レ米國ノ方ニテ嚴
シク掛合ニ及フ可キ事故タル可シ
御書狀中日本人ノ所為及ヒ征討ノ事體并ニゼ
子ラールレゼンドルカ之ニ関連セシ事等ニ関
スル者又彼カ支那ニ敵對シテ日本人ヲ補助セ
ント欲スル意有ルヲ論ル者等ニ就テハ嘗テ

捕囚ヲ受ク可キ犯罪ノ所為有ル證據トナル可
キ者有リトハ相見エ不申候

現任 セクレタリー ジョーンズ、カドワルド

第四百二十九號

第七十六號

千八百七十四年四月二十二日東京日本
ノ米國公使館ニ於テビンカム氏ヨリフサシ
氏ニ贈レン書(五月廿五日受取ル)

拜啓前週日間ノ風説ニ日本政府フアルモサ島
征伐ヲ為メニ海陸軍ヲ送ラントシ太平洋海郵便

汽船會社ニ属スル米國船ニウヨルク号及ヒ米
國人三名即チゼラールレゼンドルリウテナ
ントコンマンドルカダセル及ヒワットス氏別
ニ英國船ヨルクシヤイル号ト共ニ此征討ニ伴
フ可キ趣ニテ日本政府ニ頼マレタリ
當月十八日ニ外務卿ニ一書(別紙第一)ヲ呈シ又
彼ヲ呼ビテ右征討ニ米國ノ船及ヒ人民ヲ用フ
ルニ就テ風説ノ実否ヲ問ヒ究メタリ此會晤
ニ於テ卿ノ云フ日本ノ主意ハ支那或ハフラル
モサニ在ル支那人ニ敵對ノ所為ヲ行ハントニ

ハ非ラス唯フラルモサ土蕃往年其海濱ニ漂流
セシ日本人ヲ虐セシ罪ヲ問フテ其償ヲ取ラン
トスルニ在ルノミ故ニ此事ヲ成サンカ為メニ
政府ヨリ支那ノ承知許諾ヲ經テ軍勢ノ警衛ヲ
以テ大臣ヲフラルモサニ送り土蕃ノ酋長ヨリ
和親ノ談判ヲ得ント欲スルナリ是レ将来日本
漂流ヲシテ残虐ヲ被ラサラシメンカ為メナリ
ト云ヒタリ當月十八日ノ余カ呈書ニ即時一定
ノ返答ヲ聞キ度キ由ヲ主張セシカハ即チ十九
日外務卿ヨリ來書(別紙第二號)有リテ別ニ趣

意(別紙第二號ノ別紙)ヲ添ヘタリ右書面ニテ
御推量有ル可シ外務卿ノ余ニ語リシ事ヲ再ニ
舉テ政府ハ委任大臣ヲフラルモサ蕃地ニ送リ
出サントスルノ際ニ在リ又軍兵ハ警衛ノ為メ
ニ使臣ニ伴フナリ政府ニテハ毫末モ支那ニ敵
對ノ所行ヲ為ス可キ意アルニ非ラスト云ヘリ
此書面ニテ征軍ノ將ニフラルモサニ進發セン
トシ且フラルモサ人ノ上ニ相當ノ返報ヲ行フ
テ日本人民ヲシテ以後安穩ニ此海上ヲ通行ス
ルヲ得セシムル程ノ處置ヲ施サントスルノ事

實明白ニ分解セリ而シテ此事ハ支那ノ許諾ヲ
得テ為ス可キト云フイヲハ別ニ言ハサリキ支
那ノ此全島ヲ管轄スルハ趣意書中ニモ既ニ
之ヲ許ルセリ是ヲ以テ一ヶ年以前日本使節ニ
對シ總理衙門ノ言語上ノ返答ニフラルモサノ
蕃地ハ支那ニ屬セスト云ヒシ言ヲ以テ是島ノ
蕃民ノ住スル部分ヲ管轄外ト為サント欲セリ
支那領タル台灣ニ支那トノ談判ナシニ日本ヨ
リ兵ヲ遣リタル旨趣ノ布告アリタルヲ以テ予
此奉ニ付キテ米國ノ人及ヒ船ヲ日本ニ雇入ル

ト云フトモ何ノ非理トセシ此議定第二十四條
ニ確實ノ支ニ於テハ全權公使ノ裁斷ノ權ヲ與
フトアリ且ツ日本等ニ在苗ノ全權公使ハ日本
ニテ合衆國ト和親條約ヲ結ヘル國ト戰多ヲナ
ス時合衆國ノ人民ヲ日本ノ海陸軍ニ雇ハル
トテ禁制スル旨ヲ出ス可シトアリ

予ノ本月十九日ニ外務省ニ送リシ書翰ニ米國
ノ人及ビ船ヲ日本受府ニテ台灣征討ノ為メニ
使用スルハ此征討ノ支那政府ノ認許旨ヲ得ル
迄遲延セシトテ望ムルヲ足下ノ思察アラシ
レニ報告セルトテ會得アル可シ

ト云フトモ何ノ非理トセシ此議定第二十四條
ニ確實ノ支ニ於テハ全權公使ノ裁斷ノ權ヲ與
フトアリ且ツ日本等ニ在苗ノ全權公使ハ日本
ニテ合衆國ト和親條約ヲ結ヘル國ト戰多ヲナ
ス時合衆國ノ人民ヲ日本ノ海陸軍ニ雇ハル
トテ禁制スル旨ヲ出ス可シトアリ

予ノ本月十九日ニ外務省ニ送リシ書翰ニ米國
ノ人及ビ船ヲ日本受府ニテ台灣征討ノ為メニ
使用スルハ此征討ノ支那政府ノ認許旨ヲ得ル
迄遲延セシトテ望ムルヲ足下ノ思察アラシ

ヲ欲ス斯ク日本ニ向テ望メルハ則チ引証セル
第二十四条ニ拠レルナリ而シテ此征討ニ付キテ
ノ支那ノ許認唇ヲ得ル後チハ予日本要府ニ向
テ此望ヲ為シ遂ニトスルノ法律上ニ於テ其權
ナシ之レ成文律ニ日本等ノ國ニテ海陸軍ニ米
人ヲ雇フテ戦争ニ使用スルヲ禁スルハ只ニ其
國ト合衆國ノ和親國トノ戦争ニ使用スルヲ禁
スル而已ナレハナリ而シテ台島ヲ已レノ領地ト
稱スル國ハ唯リ支那而已故ニ台島内ノ支那領
ニ攻入スルトヲ支那ニテ許認セハ此ノ攻入ハ

何レノ國ニ對シテ戦争ヲ興セルニ至ラス支那
ニ對シテ軍ヲ起セルノ決定スルヲ以テナリ予
未タ十九日ノ書簡ノ答ヲ待サレ共外務省ヨリ
支那要府ノ許認唇ヲ得ルノナシニ台島或ハ支
那帝國ノ何處ニモ兵ヲ送り出スルナシ且太政
大臣三條實美ノ此征討ニ付キテノ布告ハ取リ
消シニ為リタリト予日本外務省ヨリ口達ニテ
承知セリ

十九日ノ書簡ト共ニ米國人ニテ此征討ニ雇レタルセントルカッセルワッ
川三氏紙ヲ如ク讀ムル所ニ於テ是ノ征討ノ旨ヲ明ニ示シテ其ノ後ニ
クルニ台島征討ノ海陸軍ニ役支スルノ止マル可シトノ告示ヲ

日本外務卿ニ送レリ之レ予ノ職務上ノ変ナリ
ヲ考ヘタルヲ以テナリ而シテ一昨日日本外務
卿ヨリ十九日ニ送ラレタル告示ヲ即日カツセ
ル及ヒワツソンノ両氏ニ送リレゼンドル氏へ
ノ告示ヲハ長崎ニ送レリ定メテ全氏長崎ヨリ
遠ク進トル前ホニ其地ニ着ス可シトノ答ヲ得
タリ
台湾征討ノ如艦当港ヨリ長崎ニ向テ出帆セシ
ト虽モ合衆國ノ和親國ト戦争ヲ為スニアラス
ト日本外務卿ノ保証ヲ得ルヲ以テ予ハ航海

ニ於テハ事ヲアヤマツトナカル可シト存候
古事文趣者ヲ述ヘタルハ厚ク予ノ職務ヲ辱シ
深ク我合衆國ノ權利ヲ保チ而シテ斯クナシテ
日本國ノ有スル自主國ノ權利ヲ妨碍スルニ本都
合ヲ避ケンテヲ取スルヲ以テナリ
予ノ處置是下ノ意ニ符合センコトヲ深ク希フ故
ニ右事件ヲ是下ノ意ニ任ス且ワ殊ニ新ラタニ
事起リ而シテ予事ヲ是下緊要ノトト思ハレナ
ハ是下電線ニテ報告ナシ給ハント希フ所首
シヨシ、エビンガム



